

札幌学院大学における「実習前評価システム」について

(職能団体への回答および 2014 年度報告として)

はじめに

本学における実習前評価および O S C E に関する立場と、2014 年度報告をまとめて報告する。この報告は、北海道社会福祉士協会からの要望書（2014 年 2 月 5 日付）と北海道医療ソーシャルワーカー協会からの要望書（2014 年 1 月 27 日付）の回答であるとともに、北海道ブロック社会福祉実習セミナーにおける 2014 年度報告でもある。

報告に入る前に明確にしておきたいことは「実習前評価」の内容（『実習コンピテンス・アセスメント』）と、その方法としての「O S C E」「C B T」を区別して理解したいということである。「実習前評価システム」に関する議論や、職能団体からの要望においては、両者が同一のものと理解され混乱を招いている面も少なくないからである。

実習前評価に関する本学の立場

- 実習前評価として知識面・技術面を評価の対象とすることについては必要と考える。
- 技術面の評価は、それを実施するにあたり事前に評価項目となっている内容、評価方法が演習教育において十分に展開されている必要がある。
- 技術面の評価として、現行の O S C E を 実習のスクリーニング に用いるにはいくつかの疑問がある。

（演習教育の授業あるいは定期末試験に代わるものとして O S C E を用いることは養成校の個別の判断としてあってよいと考える。実習生の意識やある種の技術向上にむけた教育方法としては可能性を有している。）

1 実習への適格性判定に関して

実習という豊かな教育経験を、事前の技術評価でその機会を奪うような可能性を内包するシステム（実習スクリーニング機能）には同意しかねる。実習の適格性判定は、より総合的かつ慎重に判断される必要があるのではないかと。また、仮に事前の技術評価で実習適格性を判定する必要のある場合であっても、次の 2 で述べるような理由で、O S C E という方法には十分な妥当性があるとは思えない。

2. O S C E という方法に関して

援助技術における「型」の習得はある意味で重要だが、現行の O S C E の評価対象となっている技術のひとつひとつは、「所作」や「マナー」、「手順」的な印象が強い。つまり技術面の実習前評価の方法として、O S C E の内容面での妥当性が十分とは思えない。むしろ、実習前評価（技術面）として確認したいことは、「所作」や「マナー」「手順」だけでなく、会話から主訴とニーズを把握すること、面接の展開や流れの適切性、今後の見通しなどに関する理解など、何のためのどのような面接であったかというアセスメントの基本内容が評価の対象となる必要がある。「技術」とは「所作」そのものではなく、「所作」を伴う観察・判断・価値の統合ではないだろうか。

3. 専門性のあり方に関する学生への影響（O S C E のもつメタ・レベルのメッセージ性）

O S C E を実習のスクリーニングとして過度に強調して実施することで、技術面に矮小化された専門性のあり方を、暗に学生に示すことになっていないかという危惧を有している。技術面

を評価しなくてよいとは思わないが、OSCEという道具で実習の適格性判定を実施することへの危惧である。

実習前評価（技術面）および方法としてのOSCEに関する問題（課題）

以上で述べた立場から、特に議論の焦点となっている実習前評価（技術面）および、その方法としてのOSCEに関する問題は3点に集約できる。

1. 『実習コンピテンス・アセスメント』の内容面の精査について

『実習コンピテンス・アセスメント』を基盤として想定されている実習前評価項目は、膨大な項目数である。この内容の技術レベルを評価するものがOSCEだとすると、もうすこし内容面の精査（どの項目が全領域のミニマムとして求められるのか）をする必要がある。また、そのミニマム項目の達成レベルをどう想定するのか（0・1評価／段階評価／内容評価など）。

2. 実習前評価項目（技術面）を図る方法について

実習前評価の方法は、上記したように内容や達成レベルの想定によって、本来的には多様でありうるはずである。その多様性を閉ざしてはならないと考える。もし仮に、OSCEがその一つとなりうるのであれば、方法に関する信頼性・妥当性が厳しく問われたうえで有効性を主張できるレベルまで精度を上げる必要があるのではないか。

＊OSCEに関する調査研究は過去に実施されているが、有効性に関して「相関関係」が確認されても「因果関係」に関して明確ではない。同様の主張が北星学園大学からもなされている（「精度の問題」）。

3. 実習のスクリーニングについて

上記2点から、少なくとも当面、OSCEが実習スクリーニング機能を果たしうるとは思えない。

2014年度の実施状況

これまでと基本的に同じ方向性のもと、技術演習については改善を加えた。具体的にはクラスでのロールプレイ発表をより学生の体験に即した事例・場面とし、事例検討（ロールプレイ準備）・場面のロールプレイ・フィードバックという一連の展開を重視した。

●「知識評価」に関して

「北海道ブロック実習前評価システム検討委員会」による「実習前コンピテンス・アセスメント」を元に、実習前段階で必要不可欠な基礎的知識の項目を抽出し、「実習生が備えるべき基本的知識」として実習生に配布し、実習前にテスト（穴埋め形式のペーパーテスト）を実施した。

また、「Ⅲ 実習に必要な知識の側面」については、実習の事前実習における作業課題として位置付けて領域ごとに実施した。ペーパーテストは、50問で、得点が半分以下の学生と欠席者には追加的措置を実施した。多くの学生は比較的、準備がなされていたが、一部の学生は準備不足であり再試を行った。

●「技術評価」に関して

以上の報告のとおり、OSCEは実施していないが、演習教育の総合的評価を実習前評価（技術面）とした。演習で展開した主な内容は、以下のとおりである。

①実習前に基本的な面接技法等についてロールプレイを用いた演習を複数回、実施した。

- ②領域ごとの小クラスに分かれて、その領域の実習で体験すると思われる具体的なコミュニケーション場面をあらかじめ準備して提示し、グループ討議の上、学生が順番にロールプレイ発表を行う機会をもち、自己評価・他者評価・教員評価を行った。
- ③プロセスレコードを用いて、事前実習（6月）等での体験場面の振り返りと、ロールプレイを行った。

本学における実習前評価の課題

上記で報告してきたように、実習のスクリーニング機能を有するOSCEの導入は予定していないが、実習前評価（技術面）に関する課題は以下の3点が残っている。

- ① 実習前評価（技術面）の内容をどう設定するか
全領域のミニマムとして何が必要で、どう達成レベルを想定するのか。
これは容易な作業ではないが今後も検討を継続していく。
- ② 実習前評価（技術面）の「評価」の仕方をどうするか
ブロックが提示しているOSCEは、7分の手順化された場面における、細分化された技術の段階評価によって、実習前のある時点における総括的評価（実習のスクリーニング機能）を志向している。これがはたして実習前評価（技術面）を図る標準的な方法として適切かどうか前述したような疑問が残るため、本学では演習教育における個別レポートの積み上げによる形成的評価によって個別・具体的に実習前評価（技術面）を行う方向で検討している。実習前評価（技術面）として何を最低限、習得させるのか（内容や達成レベル）が明らかになれば、それをどう測り、評価するか（方法）は多様に検討されてよいはずである。
*これは技術教育に関する評価問題として多様な議論・立場がありうる。
- ③ 実習前評価（技術面）のプログラム開発
実習前評価（技術面）と演習教育の連続性をもたせた効果的なプログラム開発が課題である。

2015年度の取り組み：「当事者参加型実習前評価システム」にむけて

2015年度から当事者参加型実習前評価システムを試行するための準備を始めている。

これは、社会福祉実習における実習生としての適切な振る舞いや、実習にあたって求められる基礎的な面接技術の評価を目的として、地域住民や当事者団体に協力を依頼して準備をおこなったうえで、ソーシャルワークのもっとも基本的な「場」である居宅を訪問して模擬面接（複数回）を行うというものである。

これにより、実習にむけての事前学習や実習中の学びを学生個々の状況に即して主体的に進めることが可能になると同時に、基礎的な面接技術（挨拶や自己紹介、場に応じた姿勢や言葉のやり取り、必要な問いかけや応答のしかた、利用者理解、生活理解など）の習得状況を把握することができる。また、この試みは地域住民や当事者団体とのつながりや連携を基盤とするものであり、実際の地域的課題や福祉の問題に向き合う協働のきっかけともなりうる。

現在は、このプログラムの準備を始めており、2015年度試行を経て改善を加えていく予定である。

最後に、2つの職能団体への回答書が大変遅くなりましたこととお詫び申し上げます。今後、本学としても真摯に実習前評価システムの構築を進めてまいりたいと考えております。